アーチャー・ブラウン『ゴルバチョフ・ファクター』

(小泉直美・角田安正訳, 木村汎解説, 藤原書店, 2008年, 762ページ)

中 村 裕
(秋田大学)**Archie Brown, *The Gorbachev Factor*
(Translation, Fujiwara, 2008)**NAKAMURA, Hiroshi
Akita University

1996年にイギリスの手堅いロシア研究者によって著された浩瀚なゴルバチョフ論が、今回極めて読みやすい形で翻訳された。

アーチャー・ブラウンは、ゴルバチョフの知的世界の形成、書記長就任から筆を進め、共産党の人事刷新、経済改革、政治改革、新しい外交政策とペレストロイカの諸相を描き、民族問題の深刻化、ソ連邦の国家体制の危機、1991年8月のクーデター、同年12月のソ連邦崩壊までの時期のゴルバチョフと彼を取り巻く政治状況を論じている。後半矛盾を露呈するようになったペレストロイカ、ソ連邦の崩壊、社会主義の思想・体制の権威の失墜等を根拠として、ゴルバチョフの脇の甘さを指摘し、合理的な改革のロシアの民族的・文化的土壌との不整合を根拠としてゴルバチョフの改革の失敗の必然性を論じる議論は少なくない。例えば、マーティン・メイリアが1994年に著した『ソヴィエトの悲劇 ロシアにおける社会主義の歴史、1917－1991』には、ソ連社会主義の改革の可能性を信じる「幻想的な」議論を一喝しなければならないという筆者の思いが明瞭に示されている。そうした議論に対してブラウンは、ソ連社会主義の現状と共産主義の理想化の矛盾を認識し、その是正・改革に真正面から取り組んだゴルバチョフの役割は今日改めて検証・評価されなくてはならないという立場をはっきりと打ち出している。ペレストロイカの時期に提起され、具体化された市場原理の導入や政治的競合性の制度化・民主化は、既に反体制運動によって主張されていたという議論に関しても、ブレジネフ時代末期、アンドロポフ、チェルネンコの統治時代に反体制運動は弾圧のために力と影響力を失っていたと指摘し、改革が公然と議論され、具体化・制度化が可能になったのはゴルバチョフの決断によるものであると断言する。ブラウンは、ゴルバチョフがソ連共産党書記長に就任した1985年の前と後との相違を強調する。本書が「ゴルバチョフ・ファクター」と銘打たれているのも、そうした著者の判断に基づいている。

その「ゴルバチョフ・ファクター」のなかで重視されているのは、ゴルバチョフの知的関心・学習意欲の高さである。それ自体としては新しい指摘ではないが、ゴルバチョフの思考の合理性・実務性がムリナシの回想等を通して説明され、また妻ライサの農民の生活様式を対象とした社会学的調査が建前にとらわれることなくことなく、現実を直視して斬新的な政策を

進めていく彼のスタヴローポリ地方の第一書記としての仕事に大きく貢献したであろうということが示唆されている。また、ゴルバチョフは自らをフルシチョフのスターリン批判に衝撃を受けた六〇年代人の一人として位置づけている。

ゴルバチョフは1978年11月に党中央委員会書記に抜擢され、1985年3月に書記長に就任する。その過程においてブラウンが重視するのは、もちろん現状維持に固執する勢力と刷新・改革を志向する勢力との葛藤という権力闘争の側面である。同時に、刷新・改革を志向するゴルバチョフの確信は専門家・知識人との交流・彼らからの学習によって理念的・理論的に裏打ちされていったことが鮮明に描写されている。ゲオルギー・シャフナザーロフ、アレクサンドル・ボーヴィン、オレーグ・ボゴモロフ、アペル・アガンベギャン、タチヤナ・ザフラフスカヤ、フョードル・ブルラツキー等がゴルバチョフに影響を与え、ペレストロイカの理念を創出・推進した人々として紹介されている。本書では、後にゴルバチョフに対して批判的な言辭も発するようになったアレクサンドル・ヤコヴレフをゴルバチョフの改革の最大の盟友として描いている。

ペレストロイカは共産党主導の「上からの革命」として展開された。当初、それはブレジネフ時代の末期に顕著となった「停滞」を清算するものとしての経済の「ウスカレーニエ（加速化）」に力点が置かれていたが、その後質的な転換が強調されるようになり、更に力点は経済改革から政治改革へと比重が移された。政治改革は、最終的には1990年3月のソ連共産党一党体制の放擲・複数政党制の導入に行き着いた。その場合、その政治改革はいかなる政治理念に立脚するものであったのか。当初ペレストロイカは、マルクス・レーニン主義所長ゲオルギー・スミルノフに代表されるように、正統派的なマルクス・レーニン主義に対してレーニン主義をリベラルかつ民主的に解釈するという立場で推進されようとしていた。市場原理の導入はレーニンのネップの導入と二重写しにされた。しかし、たとえ「社会主義法治国家」と「社会主義」と形容詞は付けられていても、「法治国家」の提唱がレーニン主義と矛盾することは明らかであった。ゴルバチョフ自身は、社会主義者の立場の堅持を確信しつつ、社会民主主義の方向に傾斜するようになる。共産主義と訣別し、社会民主主義的方向性を選択するに至ったゴルバチョフの決断をブラウンは高く評価し、そこからゴルバチョフが引き受けなければならなくなった苦闘に関して共感を込めて描き出している。

その苦闘とは、政治改革の進展がゴルバチョフの立場を危うくしたことである。例えば1989年3月共産党主導のはずのペレストロイカの所産である人民代議員大会代議員を選出する競合選挙において多くの党員候補が落選した。そのことは明らかに政治改革・民主化の進展であったが、共産党・党員の権威の低下は党組織のなかからゴルバチョフに対する不満・批判を生み出すこととなった。例えば、最後のモスクワ市党委員会第一書記ユーリー・プロコフィエフは、党員を無視したゴルバチョフの独断専行を論難する―「最も恐るべきことは、ゴルバチョフが社会の民主化の必要性に関して語りながら、党を民主化しなかったことである。党、最も広範な党員の層は民主化を志向したが、指導部自身が障害を設けてしまった」(Юрий Прокфьев, До и после КПСС, Москва, 2005, стр.95)。

党員無視の独断専行に関するゴルバチョフ批判は、社会主義体制の刷新としてのペレストロイカの過程で社会主義の本質がそぎ落とされていっているという批判と連動していた。当初人事政策でゴルバチョフを支えたリガチョフがペレストロイカの進行に懐疑的・批判的になったことは、そうした事情を典型的に物語っている。最後のソ連最高会議議長アナトリー・ルキヤ

ノフのクーデターへの関与もペレストロイカによる脱社会主義化への懸念からであった。

内政面での改革の試みに加えて、最終的に冷戦を終結させるに至った点でブラウンはゴルバチョフの決断を高く評価する。ブラウンは、外相の交代、外務省や党中央委員会国際部のスタッフの活用等によって新思考外交を能動的に推進し、従来のソ連を取り巻く国際環境を好転させたゴルバチョフの成功を強調している。1つの例として、1986年10月のレイキャビクでの米ソ首脳会談が取り上げられている。そこでは、レーガンがSDIに固執したために交渉は決裂したが、ゴルバチョフとレーガンとの間には話し合いのできる相手という信頼感が生まれたのであった。ブラウンは、ゴルバチョフがそれまでのソ連の指導者と異なり、西側の指導者からの信頼感を得られる合理性と知的誠実性を備えていたことを重視する。ドイツの再統一に関しても、自らが想定した以上のスピードで事態が進行し、そのことによって軍や党からの批判を受けつつも、ドイツ国民の再統一の意思を尊重し、再統一後の同盟国の選択はドイツ国民の問題であるとの姿勢を明瞭にしたゴルバチョフの現状認識は、長期的な歴史的観点から高く評価されるべきであるとされている。

もちろん、ブラウンは、ゴルバチョフに対して無批判に、賛美一辺倒の評価を加えている訳ではない。経済を市場原理で稼働させるための五〇〇日計画に関して、最終的にゴルバチョフがシャターリンとヤヴリンスキーの策定したプランの採択にためらいを見せ、妥協的な案が採択された経緯は良く知られている。また、ワレンチン・パヴロフを首相に任命する等の人事政策の失敗も指摘されている。1990年10月から1991年3月までの改革姿勢からの後退、それに伴うエリツィンとの対立の深刻化の時期は、ゴルバチョフの「右傾化」として表現されている。

しかし、筆者ブラウンのゴルバチョフに対する高い評価と深い共感 は明瞭である。それは、一つにはゴルバチョフの社会民主主義的な政治路線へのブラウンの期待によるものであろう。それと、ゴルバチョフが若干のブレは見せつつも、専門家、研究者の意見を尊重し、政治の世界において知的なもの、理念的なものを具現化しようとしたゴルバチョフの姿勢のなかに政治家のあるべき姿を見て取っているためと思われる。それは、ペレストロイカの時代には一時期ゴルバチョフを支えたものの、その後ソ連共産党の政治的独占を弾劾する急進改革派の指導者として振舞ったが、新生ロシアの大統領となるや権威主義的統治への傾斜を示したエリツィンへの冷ややかな視線と対照的である。一政治家に対してかくも思い入れを示すのかという印象も与えるであろう本書は、ペレストロイカの時代はソ連の内外において政治の世界において理念やイデオロギーが極めて重視されていたことを改めて思い起こさせてくれるのである。